



「福岡いのちの電話」FINDの今

福岡いのちの電話スーパーバイザー

岡 秀 樹

(疋田病院 臨床心理士)



FINDの最初の一步のあの緊迫を覚えています。シナリオのない本番を迎える相談員の後方支援組の一人として立ち会ったのですが、その私も、いったい何が起ころのやらとドキドキでした。

はや30年。世も変わり、今では各種の支援対策による電話相談も整備されました。はたしてFINDの存在意義はあるのかと問う声もあるようです。

改めてその公式案内を見ると、その目的は、「孤独と人生の危機のなかで、生きる力を失いかけている人々からの相談に…深い関心と共感を持って寄り添い、失いかけた生きる力の回復を手伝う」となっています。社会が失いかけている日常的な互助・互恵の機能の一部を担う（静かに誇ってよい）ものだといってよいでしょう。

私が思うには、支援対策では支援されつくされない「孤独と人生の危機」があり、「対策」ではない何か求められている。そしてその「何か」には、「深い関心と共感をもって寄り添う」ことが含まれているのではないか。FINDは、なくてはならないものです。

しかし私が、スーパーバイザーとして関わる研修の場で目の当たりにするのは、相談員にとってFINDらしく寄り添うことがいかに大変かということです。

相談員はボランティア活動としてはまれなほど研修を重ねています。それに、電話を受けるのも月に二日で、無理のないものです。しかし相談が深刻で危機的なほど、生身の人間としての相談員には緊張が走る、でも相談員として「深い関心と共感」のために集中力とゆとりを保たなくてはならない。それは相談員にとって大変な、宿命のようなジレンマです（最近では、その

集中力を裏切るかのような「不真面目でユルい」相談が増えているというこれまた宿命的な「副作用」も生じていると聞いています。

おのずと私の役割も、「いかに寄り添うか」について話し合うことと、相談員の大変さを共有することになります。

ところで今、相談員が不足していると聞きます。一つだけその背景に触れます。

相談員が発足時の約3倍になったとはいえ、電話相談は1日4時間から24時間に、さらにインターネットの活用など活動は広がり、それに応じて組織も拡大しています。それは公的事業からも当てにされるほどですが、その運営の多くが相談員に支えられています。組織の運営や充実に関わることは、相談員にとって互助・互恵の精神の発露になり、人とのよい出会いという体験も得られます。しかし運営にかかわる活動のために疲弊し、やめられた相談員もいます。

相談員の不足か、活動・組織の過剰か。いずれにせよ、FINDの生命線は電話相談活動です。それに欠かせない「集中力とゆとり」が失われると、相談員の互助・互恵の精神も許容範囲は狭まり、共感力を発揮しにくくなるのではないのでしょうか。いかに「ゆとり」を生み出すか。FINDの成熟のための課題かもしれません（そのために組織内に新たな班が立ち上がることがないように願っています）。

